［翻　訳］

イラズマス・ダーウィン著

「植　物　の　愛」(2)

出版　1806年
翻訳　加　藤　芳　子

湿地の女王、尊大なモウセンゴケ[28]は
イグサが縁取る川岸や、コケに刺繍された河床を踏みつけ　230
光沢のある絹の服の、あり余る程のひだは
そのほっそりした腰を包み、地面の上を引きずっている。
五人姉妹のニンフが、優美に楽々とそよ風に合わせて
水に浮かぶ紫色を、集めたり広げたりしている。
そして五人の美しい若者が、従順な愛で　235
彼女のきょろきょろした眼の、優しい命令に
　　一々従っている。
美しく優雅に彼女が、雪のように白い首をうなだれると
その額のあたりには、ダイヤモンドの帯がふるえる。
彼女がふり向けば、銀色の後光が輝く。
そして彼女が踊ると、生き生きとした輝きが燃える。　240

美しいスイカズラ[29]は、露のおりた芝生に跡をつけ
朱色の朝焼けを、もっと鮮やかな紅潮で飾る。
暗い岩山や深い谷間のあたりに、巻きつき

夏のそよ風を、春より甘い息吹の香りで満たす。
自然な優雅さと飾らない安楽で、彼女は　245
豊饒の角に魔法をかけ、その腕に抱く。
五人の恋敵達は、優しい気づかいを見せ
宝の黄金を、横目で見る。

巨大なテネリフ火山［オーストラリア］が、
その紺碧の頂上をもたげる所に
高くそびえるタカネナズナ[30]は、ワシの巣を造る。　250
そのぶら下がっている高巣を、氷の洞窟が囲むところに
昔は火山が、岩山の地下を掘り進んだ。
喜んで美人の周りを、四人の恋敵の貴族が登り
その草木がはびこる断崖に、二人の召使いの
若者がかしずく。
空高く、沈みゆく夕陽の中に、美人は立ち　255
その高い影は、かなたの国々でも起伏している。
おお、空の住人よ、とどまりなさい。
神聖なヤドリギ[31]よ、天使の飛行からおりなさい！――
――汚れた土をさげすみ、彼女は空高く飛び
真っ白な羽毛をふるわせ、金色の翼をはばたかせ　260
無限の大空の野の、高所をさまよい
彼女の天がける恋人達を、雲の中で探す！

道のない海で、コケむした長椅子に寝そべり
サンゴの森の女王、アマモ[32]は眠る。
銀色の海草は、そのベッドの周りにからみつき　265
かなたの大波が、頭上でつぶやいている。――
頭上の海には、その紺碧のドームがのぼり

「植物の愛」(2)（加藤芳子）

水晶のアーチが、水晶の柱の上にかかっている。
透明な貝殻が屋根となり、小塔は輝き
海底のかなたに、その色とりどりの光を放つ。　270
真っ白い床の上を、次々と［魚］影が動くと
上の波立つ波は、高なり、くだける。――
ニンフの周りで、彼女の人魚の列は
その輝く髪をなおし、東洋の真珠で編み
す早いヒレで、彼女は海の波を切って進み　275
銀色のすい星のように、太陽に向かって勢いよく飛び上がる。
ホラ貝を高らかに吹き、彼女の海で生まれた
恋人たる、ウロコだらけの群れを召集し、岸に上がる。

北極のあたりでも、愛の炎［オーロラ］は高く昇り
氷におおわれた胸も、神秘の炎を感じる！――　280
雪の揺りかごに揺られ、北極の空気にあおられ
優しいダイオウウラボシ[33]よ、あなたの金髪は輝く。
二つに裂けたひづめを、大地に深々と下ろし
彼女はそのしなやかな首を、ぐるぐると曲げ
灰色のサンゴのコケや、白いタチジャコウソウを食い取り　285
ピンク色の舌で、とける白い霜をペロペロ食べる。
遠くからその母獣は、静かに優しく見守り
植物の子羊は、メーと鳴くように見える。
――さて、脂ぎった鎧のせいで、暖かく
　　軽々と浮く
ばかでかいクジラは、氷の海でもはね回る。　290
流氷の島のまわりで、ヒレは大きくひるがえり
荒々しい大波の中を、その巨体を追い立てる。
恐ろしく大きなあくびをすると、彼は逃げていく

　　魚の群れを捜(さが)し
牙(きば)のふちで、その大きな頬(ほほ)を締(し)め
荒波の上に、そのむき出しの鼻孔(びこう)を出すと　295
透明(とうめい)な潮(しお)の柱を、空中に吹き上げる。
銀色のアーチが、夕陽を捕(と)らえ
つかの間の虹(にじ)が、海流の上でふるえる。
　貞節(ていせつ)なオジギソウ[34]は、センスは上品だが弱々しく立ち
乱暴(らんぼう)にさわられるたびに、臆病(おくびょう)な手を引っこめる。　300
しばしば軽い雲が、夏の森の空き地の上を
　　越えるように
彼女はその動く影に驚(おどろ)き、ふるえる。
そして彼女の柔(やわ)らかな姿を通して、生き生きと
集まってくる嵐(あらし)の、ピューピューいう
　　ざわめきを感じる。
近づく夜に対して、その可愛いまぶたを閉じ　305
新鮮な魅力(みりょく)で、空に現れてくる光を歓迎(かんげい)する。
明るい上品さと、謙虚(けんきょ)な誇(ほこ)りにおおわれ
彼女は東洋の花嫁よろしく、モスクに向かう。
そこで彼女の静かな誓(ちか)いは
その主人の明るい妻妾(さいしょう)の女王として、
　　不滅(ふめつ)の愛を示す。――　310
そのように水銀(すいぎん)は、そのガラスのように透明(とうめい)な塔の中で
変化する時に合わせて、沈んだり上ったりする。
そのように磁石(じしゃく)の針は、それが好む北極の方角を向き
動くにつれて、細かく振動(しんどう)して、ふるえる。

　葉も落ちた森の空き地では、全てが弱々しくふるえ　315
悲しいアネモネ[35]［イチリンソウ］は、その頭をかしげた。

「植物の愛」(2)（加藤芳子）

悲しみは彼女のほほの、バラ色を薄(うす)め
可愛いまぶたに、真珠(しんじゅ)の露をしたたらせた。
――「ごらん、明るい所から、芳香(ほうこう)のする
　　そよ風に乗って
夏の先触(さきぶ)れのツバメ[36]が、すうっと飛んでくる。　320
優しい空気よ、そよげ！　智(ち)天使の唇から
その芳香のある霊妙(れいみょう)な力を、私の苦悶(くもん)する心に
　　授(さず)けて下さい。
あなたの静かな声は、柔らかな花を引き出し
その鉛筆は花を描き、その息吹は［花を］芳香で満たす。
おお、鉛(なまり)の鎚矛(つちほこ)で、霜(しも)という悪魔を追い払って下さい。　325
霜は私の不幸な人生を、死にも似た眠りの中に
　　閉じ込めてしまう。
霜のかたくなな心を溶(と)かし、その鉄のような
　　冷たい手をどけさせて下さい。
私の象牙(ぞうげ)のような白い花びらを、広がらせて下さい。
そうして、春の額(ひたい)を飾るつぼみが全て
あなたの空に漂(ただよ)う翼(つばさ)にのって、芳香を
　　あたり一面に発散(はっさん)するように！」――　330
彼女の優しい祈(いの)りに、慈悲(じひ)深い西風は屈服(くっぷく)し
移動する貝に乗って、青い草原を堂々と進み
彼女の美しい大邸宅(ていたく)の上で、そのささやく
　　杖(つえ)を振り回し
彼女の象牙(ぞうげ)のように白い花びらに、広がらせる！
彼女の子孫(しそん)に、新しい命で伸(の)びさせ　335
輝く微笑で、快適な空にあいさつする。
それでニンフは美しく紅潮して、誇り高く輝く。
すると西風は、彼女の深くかぶったほろ型ずきんを

ふわっと横に飛ばし
ぶしつけなキスで、彼女の胸の透けたヴェールを
引き裂き
はためくネッカチーフを強風に振り動かす。 340
おおっていた天蓋が、引いて開けられると
金ぴかのランドー馬車は、なめらかな芝生の上を
すうっと行き
キラキラ光る美男美女の群れを誇示する。
すると彼らが進むにつれて、そよ風が彼らをあおぐ。

不気味なスノードン山［英国ウェールズ］が、
コンウェイ湾の上に、その目もくらむような崖を 345
向け、ふもとの大波の音に、耳を傾けるところでは
内気なツメゴケ[37]が、絶頂の石をよじ登り
一人で空中に成長する、孤独を飲んでいる。——
彼女の頭上には、無数の星が明るくまたたき
冷たい月の光が、その火打石質のベッドを
金色に輝かす。 350
その間、裂けた岩の周りを、耳ざわりな竜巻が
吹きすさび
その下では暗い雲が、雷鳴をとどろかせて
すうっと飛ぶ。——
彼女と婚約した恋人は、けわしい道をたどり
露のしるしの上で、彼女の軽やかな足跡を追う。
喜んだヒュメン［婚礼の神］は、そのたいまつを燃えさせ 355
断崖のあたりを曲がりくねって進み、迷路のような
道を照らす。
二人のひそかな誓いの上に、彼の貞淑な影響を及ぼし

二人を賛美している周りの荒地を、バラの花で飾る。

　天の前列で、シリウスの星が高く輝き
ブリタニアの上に、その炎の髪を揺らす時［冬］には　360
霧雨が降ることもなく、露もおりず
この国の波に削られた海峡も干上がり、その小川も
　　無言となる。
弱った草がうなだれると、花は色あせ
乾ききった大地は、枯れゆく森の空き地の下で、
　　口を開けている。
――けだるい足取りで、美しいナベナ[38]は退き　365
「優しい露よ、降りなさい！」と気絶しながら、
　　ニンフはくり返し
深い谷を捜し、むし暑い木陰で
水の精ナイアデスに、助けを求めるが、空しい。――
四人の森の若者は、水晶の酒杯の中に
味わわれた事のない宝を入れ、感謝している
　　美人のもとに持っていく。　370
彼女が喜び、謙遜しながらも優美に、彼らの手から
　　それをすすって飲むと
冷たい波が、彼女のサンゴのように赤い唇を映す。
アカネ[39]の花は謙虚だが、品質のよい根を選んで
大なべの中にかざせば、なべの中は緋色に染まる。
立ちのぼる蒸気の中で、美人は暖かくなり真っ赤に燃える。　375
まるで霧の中で、露のおりたバラが赤らむように。
錬金術により、四人の恵まれた若者は、離れた所で
白い羊毛に染色したり、染めた織物を広げる。
老年のほほの上に、青年の暖かさを広げ

薄(うす)い色の眼をしたニンフを、バラ色で飾る。 380
それで王女メディアが、略奪(りゃくだつ)されたコルキスから
歓喜(かんき)するギリシアへ、黄金の羊毛を持ち帰った時
騒々(そうぞう)しい海岸で彼女は、魔法(まほう)の薪(まき)を積むと
大なべは沸騰(ふっとう)し、薪束(まきたば)は燃えた。
年老いたイアソンは、煮え立つ波の上を喜び[40]泳ぎ 385
新しい活力が、その強まった手足にみなぎるのを感じる。
わくわくする神経を通り、忘れていた情熱(じょうねつ)が突進(とっしん)し
彼の心の周りを、以前よりも熱いつむじ風がまわる。
以前より優しい炎で、彼の燃える目玉は輝き
以前より濃い色の髪は、その額(ひたい)のあたりでなびく。 390
　ジャワ島が、水に浸(ひた)って
森の天蓋(てんがい)が、空高く広がっている所では
喜んだエピデンドルム[41]が、ゆれるマツの木をのぼる。
この大胆な美人は、空高く輝き
熱帯のそよ風に、その輝く髪をあずけ 395
明るい夕立を飲み、空気を常食(じょうしょく)とする。
彼女の子供は喜び、その未熟(みじゅく)な翼を広げ
空中高く浮かんでいる。そのぶら下がったゆりかごが
　　揺れている間
世界の眼たる暖かい太陽と、香ばしい西風はそよぎ
眼下の世界を、うらやむでもなくじっと見ている。 400

　インドの風そよぐ岸辺(きしべ)に、波が押し寄せるように
彼女のユリのように白い手に、その紅潮したほほを
　　押しつけ
セイヨウセキショウモ［藻］の花[42]はすわり、涙あふれる眼を上げ
波に流された恋人の名を呼び、空をとがめる。

彼女は寂しく静かに、ため息をつく。
彼を思い、日ごと日没に。彼を思い、日ごと夜明けにも。――
「はるか高い天の平原を照らし
大海にその輝く髪を浸す、輝く天体達よ
夜の黒い額の上に銀をかぶせる、青い月よ ――
だって汝らは、彼の別れの誓いの証人でしたから！
汝ら傾斜した岸壁や、暗い波、轟く岸辺よ ――
汝らは、彼が誓った優しい言葉を、そっと反響させたでしょう！
星や海には、愛の翼を保つ事ができるのでしょうか？
おお、私のさすらい人を、この腕に再び導いて下さい！」

彼女の軽快で勇敢な小舟のような葉を、勇敢にも
　　アオサ属の海藻[43] は導き
跡なき潮の中でも、その主人［オシベ］を捜す。
彼女のひそかな愛の誓いを、キプロス島の
　　女王［アフロディーテ］は聞き入れ
空を舞うアルキュオーン達は［風を静め］、彼女の子供の
　　エロス達が、恋人達を守る。
彼らはそれぞれ、自分の浮くゆりかご［オシベ］に
　　乗って押し寄せ
さざ波を起こし大洋は、その艦隊を引き連れてくる。
かくて、優しく崩れるかと思うと、高まる波の上で
美しき海の精ガラテイアは、その銀の貝殻を操縦し
いたずら者のイルカ達は、絹の手綱を引き
彼女の美声に聞きほれ、海原をすべるように泳いでいく。
荒涼とした入りくんだ海岸を、彼女が進めば
ほとばしる小川や、でこぼこした崖、風に揺らぐ
　　森のそばで

森のニンフ達は、マツの木のそばで、その髪をなびかせ
水の精ナーイアス達は、不思議そうに岩の間から
　　顔をのぞかせる！
人魚の群れが喜んで、サンゴの小部屋から浮いてきて
トリトーン達は驚き、そのねじれた［ホラ］貝を見つけた。　430
魅せられたキューピッド達は、追いかけながら、
　　車の上をさっと飛び
その雪のように白い翼は、海面でキラキラ光る。
そして彼女が、その眼の光の色を変えると
そよ風は優しくため息をつき、好色な大洋は燃える。

　ダヴ川［ダービー州］の緑の岸辺に、美しいシロキクラゲ[44]は立ち　435
川の中に、彼女の遊び好きなイメージを見て
ごつごつした岩や、人跡まれな小さな谷間、
　　こだまが響く森にむかい
その秘めた恋の、甘い悲しみを歌った。
「おお、待って、戻って！」――潮騒のひびく
　　海岸線にそい
悲しげに水の精ナーイアス達は叫んだ――が彼女が
　　戻る事はなかった！――　440
さて雲をまとい、むっつりした夕べはしかめ顔をし
衰えた南東風の神エウロスは、大地をすれすれに吹いた。
霧にまぎれた月は、その三日月の光を引っ込め
宵の明星と共に、夜の縁の中に沈んだ。
ほの暗い電光の流れ(北国のあけぼの)も　445
弱々しい光彩を放ち、芝生の上で震える事はなく
恵み深い星が、一条のつかの間の光を放ち
さすらい人を旅の途中で導き、道を照らす事もなかった。

暗くけわしい岩山の周りでは、旋風(せんぷう)がかすかに吹き
森は頭上でうめき、川は眼下で豪音(ごうおん)と共に流れる。　450
絶壁(ぜっぺき)の上で彼女が、立ち止まりながら動くにつれて
哀(あわ)れに思った木の精ドリュアス達は、その森の中で
　　高く鋭(するど)い音を出す。
彼女は飛び――立ち止まり――あえぐ――後ろを振り向き
風が吹くたびに、悪魔がうなるのを聞く。
――寒々とした突風が、彼女のはためく衣服を広げると　455
寒気が雪を、彼女の震える胸に激しく降らせる。
彼女のかじかんだ手足を、冷たい感覚が矢のように走り
身を切るような氷の電光が、彼女の心臓を震わせる。
「沈んでしまう！　おお、助けて！」と彼女は叫ぶ。
その固まりかけた舌は、とぎれた音さえ発しさせない。　460
涙がはらはらと、そのほほを伝って落ち
氷の真珠が、キラキラ輝く氷原をおおう。
凍るような雪が、彼女の持ちこたえている足を囲み
彼女の脱出(だっしゅつ)を抑(おさ)え、彼女を地に根付(ねづ)かせてしまう。
嘆願(たんがん)する手つきで、彼女は無言の祈りの言葉を唱(とな)える。　465
その嘆願する手も、空中で水晶となって止まり
透明な薄い膜(まく)が、彼女の震える首に一面に広がり
その口もきけない唇を密閉(みっぺい)し、頭に銀をかぶせ
青ざめた胸を［氷の］ヴェールでおおい、上げた両手に
　　うわぐすりをかける。
こうしてこのうつつとは思えぬ美しい彫像(ちょうぞう)は、
　　氷の聖堂(せいどう)にまつられて立つ。　470
――ダヴ川の青いニンフ達は、毎年毎年
美しいシロキクラゲを嘆(なげ)いて、優しい涙を流し
イグサで編んだ王冠をつけ、悲しげに行進し

不運な恋人に捧げる、悲しむ貝殻を吹く。」

ここでミューズの神は一息ついた ── 暗くなった北極を　475
ほの暗い雲が横切り、ごろごろと雷鳴がとどろく。
震えおののく森のニンフ達は、嵐が静まると
この明るい女神を、彼らの奥深い木陰へと案内し
ゲッケイジュの木陰に、音の静まったライア［琴］をかけ
ギンバイカの冠を、彼女のこめかみの周りに
　　巻きつける。　480
── さて、軽快なツバメは、軽やかなヒナ達と
青い草原やさざ波立つ湖の上を、すれすれに飛ぶ。
孤独なツグミは、葉のない茨から声高に鳴き
驚いたカブトムシは、角笛を吹き
ぶら下がったクモは、細い指で　485
もつれた手引き糸に絡みつき、糸をよじのぼる。
陽気な地の精達は、キラキラ光って輪になり
虫食いキノコの、大屋根の下、
　　遠く離れて立っている。
素早いミツバチ達は帰り道、蜜蠟の巣を探し
空気の精は震えながら、ユリの鐘 型の花の中に
　　まとわりつく。　490
シンとした空気の中を、心地よい雨が降り
真珠のような雨滴は、笑いさざめく草花を
　　装い飾っている。

第１編　終わり

インタールード

本屋。　植物学者さん、あなたの詩は、純粋な描写で出来ていますね。その調べの中には合理的な説明があるといいのですが。

詩人。　私は単に草花の絵描きにすぎませんし、時折、地面をスキップしているだけなのですよ。ですから、歴史的なテーマを持つ人物像などは、もっと才能のある画家にお任せしているのです。

本屋。　あなたの画風の範囲の中には、どのようなテーマが入るのかを知りたいのですが。多くの人は、この自己認識の欠如のせいで、成功をしそこなってきているのですから。しかし、教えて頂きたいのですが、詩と散文の根本的な違いは何なのでしょうか？　それは単に、言語の抑揚あるいは韻律だけなのでしょうか？

詩人。　それだけだとは思いません。というのは、抑揚のある散文もあるからです。そして韻律のある散文さえあるからです。そして良い韻文というものは、聞く人がよく知らない言語でうまく語られると、良い散文と区別するのは、そう簡単ではないものなのです。

本屋。　それは、感情の崇高さや美しさ、あるいは新奇さのせいなのでしょうか？

詩人。　そうではありません。というのは、崇高な感情というものはしばしば、散文による方がもっとうまく表現されるからです。こういう訳で、ウオーリック[伯爵]が、シェイクスピアのある劇[『ヘンリー6世』第3部5幕4場32-33行]の中で、戦いに負けた後、戦場で傷ついたまま残されて、彼の友人が彼に、「おお、あなたが逃げられさえしたらいいのに！」と言う時に、「おおそれなら、

私は逃げない事にしよう」という彼の返事ほど、崇高なものはあるだろうか。このような感情に対しては、いかなる韻文の韻律も、威厳を与える事はできないだろうと、私は想像します。ですから、どんな韻文の韻律も、これ以上うまく作る事はできないのではないかと私が想像するほど、美しいものや新奇なものの例を、散文の作家達から選ぶのは、簡単な事でしょう。

本屋。　それでは、詩と散文の本質的な違いは、どのようなものの中にあるのでしょう？

詩人。　言語の韻律に次ぐ、この本質的な違いは、私にとっては、次の事の中にあるように思われます。つまり、詩というものは、非常に抽象的な考えを表現する言葉を、ほんのわずかしか許容しないのですが、これに反して散文には、それがたくさんあります。ですから、眼に見えるものから出ている私達の考えは、私達の他の五感の対象物から出ているものよりも、もっとはっきりしたものなので、視覚に属するこれらの考えを表現する言葉は、詩的言語の主要な部分を形成しているのです。つまり詩人というものは、主に眼に対して書くが、散文作家というものは、もっと抽象的な言葉を使うものなのです。ポウプ氏［詩人アレクサンダー・ポウプ］は、「ウィンザーの森」という詩の中で、次のような下手な韻文を書いている。

「そして銀色のウナギで有名な、流れの速いケネット川よ」

「有名な」という表現は、目に見えるものの概念を心に見せてはいないので、散文的だという事になります。しかしこの詩行を、こう変えてごらんなさい。

「そして、銀色のカワヒメマスが遊ぶ、流れの速いケネット川よ」

こうすれば、これは詩になる。というのはこうすると、その光景が眼に見えて

くるからです。

本屋。　これは、散文で書いた方がいいのかもしれませんね。

詩人。　そしてこれがたった一言で書かれる時には、それは散文を生き生きとさせるのです。それで、ギボンの『歴史』の本にある一節は、「当時ドイツは、広大な森で一杯だったというよりも、当時ドイツは、広大な森が影を落としていた」と読んだ方が好ましいのです。しかし、このような表現の様式が、余りにしばしば起こる所では、散文が詩に接近していくのです！　そして、もっと厳かな作品の場合には、つまり私達が楽しむよりも、教えられる事を期待している場合には、それは退屈でつまらないものになります。[エドマンド・] バーク氏の雄弁な演説の一部は、過剰な詩的装飾のせいで、難解で人を無気力にさせてしまっています。かなりの装飾が期待されている詩の場合なら、そのような量の装飾も好ましいでしょうが。

本屋。　それでは、詩の仕事は、人の心を楽しませる事だけなのでしょうか？

詩人。　詩のミューズ神は、若いご婦人達なのですから、私達は彼女達が正装しているのを見たいと、期待してしまいます。ただ、余りに沢山の薄い絹織物や羽飾りをつけているので、「ご婦人自身がどこにいるのかわからない」ような、今どきの美人達のように、という訳ではないのですが。しかしながら、ウェルギーリウスの『農耕の詩』や、メイソンの『イギリスの庭園』、ヘイリーの『書簡詩』のように、とても感嘆される教訓的な作品もあります。それにもかかわらず、科学は、散文によってこそ一番よく伝えられます。それは、その論理的思考の方法が、隠喩や直喩よりももっと厳密な、類推から生まれてくるものだからです。

本屋。　擬人化やアレゴリーは、詩を特徴づける事にはならないのですか？

詩人。　それらは、対象物を目の前に連れてくる、別の方法です。あるいは、視覚の言語で感情を表現する、別の方法です。そして実際、画筆よりもペンに、もっと適しています。

本屋。　それは変ですね。だってあなたは今しがた、それらはその対象物を、目の前に連れてくるのに用いられると、おっしゃったばかりなのですから。

詩人。　詩においては、擬人化あるいは象徴的な表象は、一般的に、はっきりしないものです。従ってそれは、そのありそうもない事に私達の注意を払わせるほど、無理矢理に私達の心を打つ事は、ありません。しかし絵画においては、表象は全てもっとはっきりしたものなので、それらのありそうもない事は明確となり、私達の注意をそれにくくりつけさせるのです。こういう訳で、以下のシェイクスピアの美しい詩行において［『十二夜』の2幕5場112-114行の男装したヴァイオラのせりふ］、「隠された人物」は非常にあいまいなので、そのありそうもない事に、私達の注意を無理やり向けさせる事は、ないのです。

> 「――彼女は、恋人［オーシーノ公］には［愛を］決して語らず
> 隠した秘密に、つぼみの中の虫のように
> 彼女のダマスク色のほほを食べさせた。――

しかし以下の詩行に於いては、「理性の人物」は、でしゃばって私達の仲間になり、その明白さと、その結果としてのありそうもない事によって、不愉快になるのです。

> 「理性のもとへと私は逃げ、彼女の助けを懇願した。
> 理性は私の状況を思案すると、状況をひとつひとつ熟考した。
> 次に私の祈りへの返事として、厳かにこう答えた。

へべ［青春と春の女神］は美人の中でも、一番美しかった。
それは本当です、と私は答えた。教わるまでもない。
理性よ、私はあら捜しをするために、あなたの所に来たのです。
それが全てなら、と理性は言う、あなたが来たように、戻りなさい。
へべのあら捜しをしたら、私の名誉を失うだろうから。」

象徴的な表象というものは、この理由で一般的に、詩においてよりも、絵画や彫像において、扱いにくいものなのです。そして、ルクセンブルク大公国[現在のベルギー］の美術館にある、ルーベンスの絵画の多くの途方もない効果から明白なように、前述の二つの芸術においては、自然の表象と一緒に導入される事は、めったにありえないのです。そしてこの理由で、それらと比較すべき実在の人物の表象が、それらのそばにある時には、そのありえない事は、もっと注目すべきものとなるのです。

この状況を十分に知っていたアンジェリカ・カウフマン夫人は、彼女が描いたキューピッドや三美神達の中に、人間の表象を導入した事はありませんでした。そして、ウェイド将軍の戦利品をめぐって戦っている「時」と「名誉」という、彼の無類の記念碑において、かの偉大なルービリアックは、この作品の主人公の頭の大メダルを、つるしただけでした。しかしながら、私達は余りにしばしば描かれたのを聞いたり見たりしたので、私達はそれらが、普通の人生には存在しないのだという事を、ほとんど忘れてしまい、それで、それらを見ても、驚きもしないような、象徴的な表象もあります。例えば、異端の神話や、天使、悪魔、死神、時などの表象がそれです。そして私達はそれらが、人間の自然な姿かたちの描写と混じった時でさえも、それらが本当に存在するものだと、信じそうにもなるのです。その事から私はこう結論づけます。つまり、私達が不自然なイメージを、嫌悪感ゆえに不快に思う事を防ぐためには、一定程度のありそうもない事が、必要になるものなのです。さもなければ私達は、それらを熟考する事に余りに興味を持ってしまい、それらのありそうもない事を

認識(にんしき)しないようになってしまうからです。

つづく